INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ ニュース NO.60

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1990年3月1日
発　行　所　(社)国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
TEL.03-821-3737(代)
FAX.03-821-6479
発　行　人　住友 義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

MRAワールドレポート　(タイ)

MRA国際チーム15名、タイ難民キャンプを訪問

サイト2、ソク・サン両キャンプでカンボジア難民と交流する

杉　裕雄（すぎ　ひろお）
(社)国際MRA日本協会職員

一、精神的支援の要請

昨年十二月十一日より十七日までの七日間、MRAの国際チームがタイ・カンボジア国境の難民キャンプ、サイト2とソク・サンを訪れた。今回の訪問は、「難民達に祖国再建に不可欠なモラルの教育を施してもらいたい」との、カンボジア民主連合政府のソン・サン首相とその子息ソン・スーベル氏のMRAへの要請に応えて行われたものである。

イギリス、フランス、オランダ、オーストラリア、マレーシア、香港、そして日本の七ヵ国十五名から成る訪問団の殆どのメンバーにとって、今回初めての難民キャンプ訪問であった。団長のデビット・ヤング氏(イギリス)は第二次大戦中、ミャンマー(旧ビルマ)で日本軍と戦った元英国兵士だが、昭和天皇崩御の際、イギリス王室の大喪の礼参加の是非をめぐって英国世論が沸騰した時、「過去は忘れられないが、許すことはできる。将来のために憎しみの鎖を断ち切らなければならない」という内容の投書を、かつて日本軍と戦った三名の元英国軍人との連名でイギリス各紙に送り、掲載された経験を持つ。副団長のアラン・テート氏(フランス)は、かつてインドシナ銀行勤務の経験があり、現在はMRAの専従として働くかたわら自由ベトナム協会事務局長も務めている。

●キャンプの若者達と語る筆者(左から三人目)

日本から参加したのは、大阪で貿易商社を経営する古川宜宏氏と慶応大学四年生の砂野吉正氏、そして私の三名であった。八八年六月に行われたMRA日本キャンペーンに参加のため来日したスーベル氏が、とにかく難民キャンプに実際に来てその現状を見てほしいと古川氏に語ったことが、今回の古川氏の参加につながったという。

◀主な内容▶

■MRAワールドレポート「MRA国際チーム15名タイ難民キャンプを訪問」 1P
■オピニオン「道路交通事故防止はモラルから」 6P
交通問題研究家　瀧山　養
■南アで人種融和に貢献するブレマー・ホフマイヤー夫妻(続報) 8P
■MRA文化講演会シリーズ　チベット文化研究所所長　ペマ・ギャルポ 9P
「ダライ・ラマのノーベル平和賞受賞と許しと和解の哲学」
■アフリカ・ザンビアで過ごした2年間(その9) 16P

二、「慰問」ではなく「交流」

サイト2での歓迎式で、「我々が必要としているのは、正直、純潔、無私、愛というMRAの思想である」とソン・サン派指導者が挨拶したように、私達の訪問は「慰問」ではなく難民との「交流」であった。ニッパ椰子で作られた集会場に集まった三百人以上の人々がまさに万雷の拍手で私達を迎えてくれた。壇上には各国の国旗が掲げられ、用意された椅子には通訳機器が取り付けられていた。食事も金ダライのような大鍋にチャーハン、骨付ポーク、ビーフン等が盛りつけられた豪華なもので、最高のもてなしで歓迎してくれた。

その後、「家族・家庭」というテーマで意見交換が行われ、まずロブ・ウッド夫妻（オーストラリア）が、離婚率の高いオーストラリアの学校では三分の一の生徒が片親であるという現状を紹介し、「一人でも多くの人に幸せを与えられるような夫婦を目指したい」という決意を語った。また、クリスティン・ジュレムさん（フランス）は、「両親の寵愛を受けて育った弟に対する自分の嫉妬を、MRAの教えに従って家族に謝ったところ、それまでギクシャクしていた姉弟関係、家庭環境が良くなった」という自らの体験を語った。難民達はこれらの話を非常に真剣な眼差しで受け止めていたが、彼らが何を渇望しているのかがひしひしと伝わってきた。カンボジア内戦を描いた映画「キリング・フィールド」で見たような、五、六才の児童が黒板に書かれてある親子のつながれた手にバツ印を書き込むような時代を彼らも生き抜いてきたのだろう。

クメール婦人部を代表して五名がスピーチしたが、それぞれの担当地域で、家庭内暴力など様々な問題の解決に努力している体験を話してくれた。中には内戦で夫を亡くした婦人もいたが、既に遠い昔のことなのか笑顔を絶やさない。五人ともキャンプの人気者らしく会場から歓声が途絶えることがなかった。

三、祖国の再建を夢見る若者達

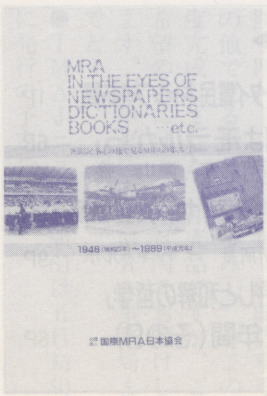
教育の問題に関しても活発な意見交換が行われた。カンニングが黙認されているどころか試験官ぐるみで堂々と行われていたボンベイの高校で、かつてはカンニングの常習犯だった少年がMRAを通じて改心し、試験官達の脅迫にも屈せず不正行為に立ち向かったという話は、老若男女を問わず聴衆に大きな反響を与え、難民達の中から一人の女生徒が立ち上がり、壇上から今まで自分が秘かに行っていた不正を正直に告白すると共に、今後は正々堂々試験に臨みたいと宣言すると、会場は大きな拍手喝采に包まれた。

また、日本に留学を希望する若者達も多かったが、経済大国日本に対する彼らの強い憧れを感じた。経済発展が著しく、技術力がある日本で学び何らかの資格を取り、将来祖国に戻った時に国の再建に役立てたいとも言っていた。

パリ会談決裂、ベトナム軍撤退による内戦の激化の中でのポル・ポト派勢力拡大といった暗いニュースば

●キャンプ訪問を前にしてバンコクで開かれた歓迎レセプション

新しい出版物のお知らせ



新聞記事その他で見るMRAの歩み①

1948（昭和23年）～1989（平成元年）

（内容の一部）

- 片山哲氏海外通信第一報世界平和の青い鳥 MRA大会に期待
- 日韓問題解決へ糸口 MRA大会で両国代表瀬踏み交渉
- 企業に浸透するMRA活動 東芝 国際会議に毎回参加
- 「GIFの基本理念とMRA」中島正樹

◇非売品ですがご希望の方に一部300円（実費）でお頒けいたします。

お申し込みはMRA事務局へどうぞ TEL：03(821)3737

かり聞いていたが、暗闇に蠟燭の炎を見る思いであった。何れにしても日本で勉強するからには日本語を修得しなくてはいけないが、キャンプに残って日本語を教えて下さいと頼まれた時は、ただただ恐縮するばかりであった。(現在サイト2では、イエズス会から派遣された日本人ボランティアが日本語を教えている)

クメール古典舞踊の紹介も行われた。五、六才位の三人の少女が音楽に合わせて踊り始める。きらびやかな原色の衣装をまとい、踊りを間違えまいとする一生懸命な姿が微笑ましかった。また、元俳優だったという男性が、クメール風古典落語を披露した。そのお返しに、砂野氏の弾くバイオリンのメロディーにチャールズ・ウィー氏(マレーシア)が加わって、「上を向いて歩こう」が披露された。

サイト2に住む難民の数は十四万とも十八万ともいわれているが、その半分近くは七九年一月のプノンペン陥落以降に生まれた子供達だという。難民キャンプの生活しか知らない子供達がクメール民族としてのアイデンティティ(主体性・独自性)を保持していけるよう、フランスの教会の援助で古典舞踊教室が設けられている。アイデンティティの確立イコール●統文化の継承とは必ずしも思わないが、故国を全く知らない子供達にとっては古典舞踊の学習もそれなりに意義があることかも知れない。

キャンプ内には小・中学校もあるし、専門技術学校にはテレビ、ラジオ、自動車は勿論のこと、コンピュータも導入されている。ソク・サンキャンプでは、手芸品作りの技術指導が行われていた。こうして彼らは将来のために技術修得に励んでいる。フランス人教授によるフランス語の法律学の講義を見学したが、以前は外国語ができる生徒は少なかったそうだ。図書室には数年前の「タイム」誌や「ニューズウィーク」誌のバックナンバーが山積みされ、フランスの漫画本もあった。

この他、キャンプにはカトリックの教会やイスラム教徒達が住む地域もある。平和な印象を受けた地区もある反面、犯罪の多い地域もあると聞いた。少なくとも十四万人以上の難民を擁するサイト2に、強盗、殺人、売春があっても何ら不思議なことではない。こうした犯罪の撲滅のためのモラルと倫理の向上にソン・サン派の指導者達は腐心していた。「ランド・ピープル」発生から十年が過ぎた今、物質的援助もさることながら、精神的支援が●要な時期にきていると彼らは話していた。

古川氏は帰国後、キャンプで受けた印象を次のように語った。

「キャンプでは実に様々なことを体験しましたが、未だに自分の心と頭の中で整理ができません。一番強く印象に残ったのは、難民キャンプには私達と同様に、楽しい時には笑い、悲しい時には泣き、お腹が空いたら食べ、体が疲れたら休む、ごく普通の人々のおりなす生活がそこにあったということでした。ただ一つ違っていたのは、私が日本、彼らが難民キャンプに住んでいるということでした。私達日本人もカンボジア人も、そして地球に住む全ての人の誰一人として自分の命や家族の命を失いたくはないはずですし、戦争を望む人もいないと確信します。しかしながら、同じカンボジア人同士で争うこの人達のように、人は何らかの仕業(憎しみ、嫉妬、復讐、利害関係etc)によって争っています。一刻も早くこの「何らかの仕業」が消滅し、カンボジアに本当の平和が訪れ、彼らと自由に話し合える日の来ることを願うと共に、日本でも私達一人一人が「何らかの仕業」から解き放されるために、いつも注意を払う必要があると思いました」。

●子供達の生活の様子を聞く古川氏(左)

●集会場で熱心に話を聞く難民達

四、憎しみは世界を滅ぼす

カンボジアは国際政治ゲームの舞台といわれてきたが、現在カンボジア和平の前に立ちはだかる最大の障壁は、ポル・ポト派の処遇である。虐殺の真相については様々な証言や情報があるが、性急な国家の改造の過程で多くの人命が失われたのはおそらく事実だろう。現に殆どの難民がポル・ポト時代に身内や親戚の人を失ったと語っていた。なぜ同じ民族同士で血を流し合うのかと言ってしまえばそれまでだが、お互いに同じ民族とはどうしても考えられないところに問題があるのだと思う。四十五年前の話ではなく、つい十二、三年前なのだから生々しい記憶があるに違いない。

母方の家族が朝鮮半島でひどい仕打ちを受けたと聞かされ、自分が直接体験した訳でもないのに心のどこかにシコリがある私は、今のあなた達に必要なのは罪を許す心ですなどとはとても言えなかった。ソク・サンキャンプの責任者ニレム・チューレン氏は八四年の小田原会議参加をきっかけにMRAに共鳴し、八七年にはスイスで開かれたコー世界大会にも参加しているが、かつてはクメール・ルージュに属していたという。

また、サイト2で会った二十二才のある青年は、「僕は小さい時に両親を殺され、すごく悲しんだ。だけど、もし僕のような人達が復讐ばかりしていたら、最終的に地球上に人間がいなくなってしまう」と話していた。憎悪は世界を滅ぼすといった言葉はこれまでもずいぶん聞いてきたが、この時ほど心に強く響いたことはなかった。

五、平和への願い

あっと言う間の五日間だった。キャンプ見学の時間がもう少し欲しかったが、やはり外部の人間には見られたくないところもあるのだろうし、こちらも彼らの心を土足で踏みにじるような行為はしたくなかった。懇意になった指導者の一人からは「プノンペンで会おう」と握手をしながら背中を叩かれた。「私達はあなた方のことを、決して忘れないでしょう」という言葉に送られ、会場から出口まで約三百メートルにもおよぶカンボジア人達が両手で作ったアーチの中をくぐり抜け、キャンプを後にした。

私はインドで植林を手伝ったことがあるくらいで何の技術も提供できないが、口があるので話くらいはできるだろうということで今回参加した。帰国後、「話し合いができて良かった。また、来て下さい」と二通の手紙を受け取ったが、彼らにとって大変な負担である切手を買ってまでその気持ちを伝えてくれたことが嬉しかった。私達の訪問は単なる「通りすがりのお客さん」に過ぎなかったのかも知れないが、「本当の友人」になれるかどうかは、私達と彼らとの今後の交流如何(いかん)にあると思う。今その方法を色々と考えているところである。

「日本人として」と堅く考えるのではなく、友達として、若い難民達が抱いている夢が少しでも現実のものとなるように応援していきたい。

六、かけがえのない命

最後に、古川氏からのソン・スーベル氏への手紙をご紹介して、このレポートを終りたい。

「カンボジアではこの二十年の間に、シアヌークからロンノル、ポルポト、そしてヘンサムリンへと、武力による政権交替が行われてきました。武力を背景とした力ずくの変革は、いずれ新たな武力による変革に屈するものであることを私達は歴史から学んできました。

日本でも十九世紀中頃に、時の徳川幕府と薩長連合を中心とする新政

●MRAソングを披露する国際チームのメンバー

●クメール古典舞踊で歓迎する子供達

府樹立派との内戦があり、双方に資金及び軍事援助の申し込みが外国よりありました。幸いなことに日本では、外国の力を借りることなく明治新政府が樹立され、外国に影響された傀儡（かいらい）政治が行われることなく現在に至っています。

皆さんは今、何のために命を賭けて戦っていますか？　ベトナムを追い出すためですか？　皆さんの信じるイデオロギーのためですか？　それともカンボジア国民の幸せのためですか？　もし国民のためだとしたら、まず一人でも多くのカンボジア人が生き残れるような方法を考えて下さい。僅か一発一ドルの銃弾によって一人のカンボジア人が殺されています。その一人が生き残れば、五十年、百年先のカンボジアにとってかけがえのない一人になるかも知れないのです。そのためにも一人でも多くのカンボジア国民が生き残れる方法を考えて下さい。

きっと近い将来、終戦のための良い機会が来るので、この戦いを終結し、五十年、百年先のカンボジア国民の平和記念日にして下さい。カンボジアの将来の繁栄のためにカンボジア国民同士が話し合い、この悲劇が平和的に解決されることを期待します」。（終り）

●キャンプのリーダー達を紹介するソン・スーベル氏（右から三人目）

●古典舞踊団の少女達と一緒に記念撮影

●カンボジアの将来を担う若者達の表情は明るかった

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　3、000円
　　法人　年額　50、000円
(2)賛助会員　個人　年額　1、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座　東京八―三八二八九
口座名　社団法人　国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌IMAJニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り
●信頼できる人との出合い
●新時代に必要な情報
●心身の健康
●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度一口50、000円（寄付扱い・年額）を新たに設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号　東京五―四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

◎OPINION

道路交通事故防止はモラルから

瀧山　養
交通問題研究家

明治43年生まれ。東京帝国大学工学部卒業後、鉄道省に入省。鹿島建設常務取締役を経て、昭和48年より国鉄技師長を務める。その後、土木学会会長、海外鉄道技術協力協会理事長も務め、現在、交通安全問題研究家として活躍中。工学博士。

一、問われる運転者のモラル

わが国では道路交通事故だけでも年間一万人（事故後二十四時間以内）を越す人命が失われ、病院で亡くなる人と負傷者はその八倍にも達し、多くの人々が被害者として、そして遺族として不幸に泣いています。

事故の直接原因はドライバーの運転ミスによるものが大部分であり、スピード違反、信号無視、無理な割り込み、甚だしくは酔っ払い運転などの違反が後を絶ちません。これらは自らの命を絶つばかりでなく、他人をも巻き添えにするので、何としても防止しなければなりません。

運転ミスの原因の中には運転技能の未熟もありますが、大部分は運転する責任への自覚の不足にあり、これは躾けという問題につながってきます。躾けは学校と家庭で育まれるものです。戦後の学校教育は労働運動の犠牲となって荒廃し、家庭は会話の不足によって破壊されつつあります。核家族化の傾向、父親の残業、母親の内職、テレビの普及などがこの傾向に一層拍車をかけているものと思われます。

自動車はオートバイを含めて走る凶器であり単なるファッションでは無いはずで、運転者のモラルが問われなければなりません。

二、過当競争の犠牲

次に、企業の経営者の責任があります。資本主義は競争の原理によって発展するものではありますが、過当競争となり、利益追求に走ると安全が犠牲になると思われます。前述した従業員の残業の多さはその現れともいえます。生産コストを下げるために下請けを叩く習慣がありますが、その皺寄せが大型トラックにきて、過載とスピード違反が常套手段と化しているのです。長距離を走る夜行トラックは休養不足のため事故を起こしています。重大事故の主役は大型トラックが演じています。他の産業の年間労働時間が二千三百時間なのに、トラック業界は二千八百時間と格別に長いことも問題です。在庫を減らす手段として「ジャスト・イン・タイム方式」が採られていますが、その無理を自動車輸送が負っているのです。各メーカーが性能を競う余り、欠陥車を次々に生み出す事も安全の点から反省を要します。企業の貪欲が交通事故の原因を生み出しているのです。経営者のモラルが問われる訳です。

三、バラバラの道路行政

次に行政の責任があります。発展途上諸国では道路を公共事業省で取り扱っている国もありますが、先進国ではいずれも鉄道、航空を含め交通省で仕切っています。エネルギー、環境、土地利用、安全などの立場から総合交通政策を樹て、鉄道を活用し、路面電車・バスを優先し、トラックと乗用車を抑制しています。

ところがわが国では自動車の生産は通産省の所管で専らその出指導であったので、市内の道路では三〇～四〇km／時、高速道路でも一〇〇km／時の制限があるのに、百五〇～百六〇km／時を出せる車を国内向けにも生産しているのです。

交通の取締には警察庁が当たっていますが、不法道路駐車とスピード違反には手を焼いてお手上げに近い状態です。交通事業の許認可と車検は運輸省が取り扱っていますが、自家用車の増加のため路面電車は廃止され、バスも後退を続けています。わが国の車検は世界一厳しいが、車の寿命は世界一短いとも言われています。

排気ガスの規制は環境庁の所管で、厳しく基準を定めていますが、自動車数の増加のため大気汚染は改善の見込みがありません。

事故の救援は消防庁ですが治療は厚生省で、手当てに隙間ができています。

肝心の道路はヨーロッパではローマ時代から馬車が使われ、街路には車道と歩道の区分が出来ています。わが国では徒歩と駕籠の道のままのところへ、戦後の自動車の時代を迎えた感がします。もともと平地が狭く人口密度が高いのに西洋に比し、可住地面積当たり乗用車で五～六倍、トラックで二〇倍も車が増えていま

す。

道路は建設省の所管ですので、公共事業の目玉として重点的に予算が投入されていますが、土地の値上がりや住民の移転反対で進展せず、渋滞解決の見込みはありません。しかも予算が政治的に使われていますので、大都市周辺の整備が後回しにされています。自動車を抑制し鉄道に移ろうとしても、今やJRは受け入れる力を失っています。このように道路行政はバラバラの状態にあり、その原因は官庁間の縄張り争いにあるのです。

四、今こそ真の政治改革を

行政が寸断され、総合交通政策を樹てられないのは政治の責任です。政治家が国策を考えないで、選挙区と後援団体の利益を考えてきたためです。世界では歴史を変えるような政治改革が現在行われつつあります。わが国では繁栄にあぐらをかいて、目先のことに目が眩んでいて真の政治改革はさっぱり進みません。政治と行政が国民の安全を憂えて、自らの姿勢を改めることなくして事故の防止は不可能と考えます。事故防止は終局に於いて「モラル」の問題と言えるのです。

（終り）

MRAワールドニュースマガジン

IT'S ABOUT TIME...

フォー・ア・チェンジ

THE MRA WORLD NEWS MAGAZINE

定期購読受付中

●フルカラー16ページ
●ニュースマガジンのニューウェーブ
●世界中の情報をすばやくあなたに

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌（英文年間11回発行）定期購読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、ご希望の定期購読料（3ヵ月分＝¥1,000　1年分＝¥4,000 ※共に郵送料込み）を郵便振替（口座番号：東京8-38289）、又は現金書留にて下記の住所にお送り下さい。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
社団法人 国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

「MRAの歴史」のビデオ（ベータ VHS）
発売中
頒価2,000円（送料込）
詳しくは事務局までお問い合せ下さい。

03(821)3737

前号のMRAニュースで南アのホフマイヤー夫妻に関する毎日新聞の記事をご紹介したが、その後、産経新聞にも取り上げられたのでその記事をご紹介したい。また、右下の記事はホフマイヤー氏が、最近南アから報告してきたレポートを邦訳したものである。左下の英語の記事は、暫定独立憲法制定議会選挙を間近に控えた昨年の十月に、地元紙の「ザ・ナミビアン」に現地のMRA関係者が三カ国語で掲載した「私達の望むナミビア」という意見広告である。併せてご紹介したい。

人

アパルトヘイト変革に献身、南ア白人良識派
ブレーマー・ホフマイヤーさん

1909年南ア生まれ。80歳。南アフリカ大卒業後、英オックスフォード大などで神学を学ぶ。34年以来、MRAの創始者、ブックマン博士の側近として活動。いとこは元副首相（故人）

「私は黒人が白人に奉仕するのは当然だと思っていた。黒人が過ちを犯したときには、いつでも、正す用意があったのに、黒人には私の誤りを指摘する権利はないと信じていた」

アパルトヘイト（人種隔離）の南アフリカで、四十年前から、人種間の融和促進に取り組んできた白人良識派。その人も、かつては、白人の「アロガンス」（ごう慢さ）と「セルフィッシュネス」（利己主義）に五〇年、南ア・ヨハネスブルクに全人種に開かれた「融和の家」を開設。人種間の対話の輪を広げることで、内側からじわじわと、体制の堅固な壁に穴をうがち続けてきた。

それが、オックスフォード大留学時代の一九三四年、同大学を中心とするMRA（モラル・リアーマメント＝道徳再武装）運動に参加、「根底から、変わった」。

以来、「絶対正直」「絶対純潔」「絶対無私」「絶対愛」―に基づくMRA運動に生涯をかけるなかで、民主化実現には、経済的安定が不可欠と強調。経済制裁を「近視眼的」と批判し、撤退した米国企業の肩代わりを日本企業に求めた。（外信部・宗　正毅）

MRA運動の同志、アグネス夫人とともに来日し、「希望は、明るい。今こそ、白人は少数支配を放棄し、黒人多数支配の下で、真の民主主義を実現すべきときだ」

「私達の望むナミビア」

THE NAMIBIA WE WANT

A Namibia that will be governed by men who believe in God and accept his authority.

A Namibia where people are not judged by the colour of their skin but by their character.

A Namibia where sufficient job opportunties can be created to overcome poverty and famine and where the spiritual hunger of people will also be satisfied.

A Namibia where there will be peace, freedom, reconcilliation and prosperity.

Peace is more than the absence of war. It exists where there is tolerance and love, love even for our enemies, and where the basic rights of people are respected.

Freedom is only possible when Christ has set us free to live according to his standards of honesty, purity, unselfishness and love and obey God's will.

Reconcilliation demands that we forgive what others have done to us and ask forgiveness for what we have done to others.

Prosperity will follow when we put the interests of our country as a whole before our own interests.

Choose you this day whom you will serve; but as for me and my house we will serve the Lord. (Joshua 24:15)

This is a call to everyone in this country to trust God whatever happens and to pray for the election that God's will be done.
The call comes from Namibians who are connected with Moral Re-Armament, a movement active in different parts of the world, also in Africa, aiming to restore God to leadership in the hearts of people and the life of nations.

ホフマイヤー氏は南アに帰国後、国内における最近の変革の状況を、次のように報告しているので、ご紹介したい。

◇

クリスチャンとしての良心の目覚めは、南アフリカの変革に大きな役目を果たしているが、白人専用の大学としてこれまで歴代七名の首相のうち五名を輩出してきたステレンボッシュ大学で起こったことはその一例である。

この大学はアパルトヘイト（人種隔離政策）に学問的な根拠を与え、オランダ改革派神学大学の本家として、アパルトヘイトは聖書の教えに沿ったものであると教えてきた。

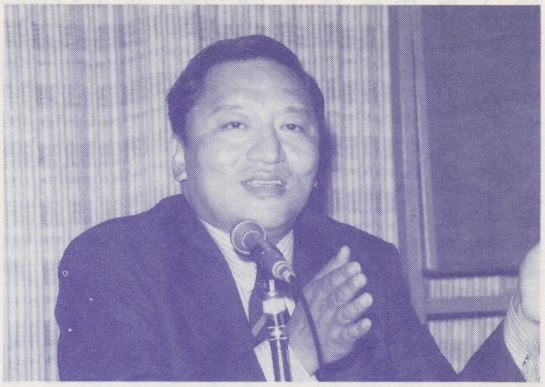
しかし現在、人種差別を撤廃したばかりでなく、その教員の半数以上がアパルトヘイトは間違っていると公式に表明している。神学大学はこれまで朝の礼拝に黒人を連れてきてはならないと定めていた教会の決まりも変え、黒人を締め出してはいけなくなった。

この変革の中心は教授達による小さなグループであった。彼らは立ち上がり、そして大学を変えた。彼らの力の源は、単なる知性的変化にあったのではなく、深い精神的な変化であり、今日、彼らは大切な国の財産となっている。

一方、黒人社会にも危機が存在する。プレトリアの黒人居住区の指導者の一人は非常に深刻に悩んでいる。彼は、全ての説教が反アパルトヘイト闘争を基礎にしていると言う。勿論彼はその内容自体は支持しているが、現在、道徳的教えの欠けた世代が育ちつつあることを感じ、道徳的基盤を欠いては健全な民主主義は育たないと彼は考えている。従って道徳的、精神的な闘いは続けられなければならないのである。

MRA文化講演会シリーズ

●注：この記事は昨年12月16日に憲政記念館で行われたペマ・ギャルポ氏の講演を要約したものです。



ダライ・ラマのノーベル平和賞受賞と許しと和解の哲学

ペマ・ギャルポ
チベット文化研究所所長

1951年チベット国ラロン生まれ。1959年ダライ・ラマのインド亡命の後、自らもインドに亡命し難民となる。1965年チベットの三少年と共に日本に留学、以来、日本在住。現在、チベット文化研究所所長。亜細亜大学アジア研究所嘱託研究員、拓殖大学海外事情研究所客員講師も務める。

ダライ・ラマ14世

Dalai Lama(The XIV th)1935年、チベット東北部アムドのタクツェルという村の農家に生まれる。二才の時、チベットの伝統に従って、第十三世ダライ・ラマの生まれ変わりとして認められた。40年、ポタラ宮殿に迎えられ、第十四世法王として即位。59年、中国のチベット占領後、インドへ亡命。67年、初来日、以後諸国を歴訪し、世界平和を熱心に訴えてきた。その仏教哲学に関する著述や祖国のための平和運動も国際的に多大な評価を得ている。平和勲章(モンゴル・67年)、名誉博士号（フランス・84年)、自由人権財団賞(スイス・88年)、アメリカ議会人権賞（89年）などの受賞を経て、昨年度のノーベル平和賞に輝いた。

◇今日のテーマは、私にとって比較的話し易いテーマです。と言いますのは、物心ついてから約三十年間、私は法王の人となりに触れてきたわけですし、また、大学を卒業しましてから物理的には直接ではありませんが、お仕えすることができる立場におりますので、法王の考えや今回のノーベル賞受賞について多少自信を持って話せるのではと思います。来年、法王の来日の可能性がありますが、それが実現すれば法王は今までの習慣から世界中どこを訪ねましてもMRAの人々と会っておりますので、皆様に法王が直接お話しする機会があることと思います。

一、チベットは果たして中国に「開放」されたのか？

法王のお話を始める前にチベットの過去について簡単に触れておきませんと、現在および将来の法王の考えについて述べることは難しいと思います。

日本に於けるチベットの紹介は、ほとんどが中国を通しての情報になっています。言葉の使い方にしても、中国の立場から見たチベットが日本に紹介されています。日本の百科事典も同様です。

例えば法王のノーベル平和賞受賞に関する新聞記事の中に「解放運動」という表現がありました。実は中国はチベットに入ってきた時点からチベットを解放したと言い続けてきましたし、日本のマスコミもチベットは解放されたと言い続けてきたと思います。そうしますと、今更改めて解放する必要などないわけです。解放されたのではなくて本当は侵略されたということをもっとはっきり言うべきだと思うのですが、今まで中国からの情報だけに頼ってきましたので、日本にはチベットに対して理解どころか誤解が多くあります。

その他にもチベットの人口、地理等についてもほとんどが日本では中国側の見方で紹介されたデータが多いのです。例えば、チベットとはチベット自治区のことだと思われがちですが、実際は現在の中華人民共和国のおよそ四分の一がチベットとなります。そして人口も約六百万あり、世界全体から見ても決して小数民族ではないと私達は思います。しかし、それを小数民族としているのは、中国には公称五十四の民族があり、その中で、チベットだけでも幾つかに分けられているためで、一種の小細工といいますか、チベットをなるべく小さく見せるためなのです。例えばチベット東部の人を「カンパ」、インドに近い地区の人を「ロバ」と呼んで、まるでチベット人ではないような扱いをしています。そうした形で「チベット人」の人口を少なくして世界中に紹介しています。

また、「解放した」という表現も私達は外国の軍隊が武力を背景にして侵入し、しかも無差別にそこの国民を殺したりすることが解放だとは思っていませんし、これは明らかな侵略だと思っています。これがこれまでのチベットと中国との関係です。

チベットは長い間仏教の哲学に基づき、なるべく内なる幸福を求めて、内面を高めることに力を入れてきました。そのために私達には、科学や物理、技術などの面で世界に貢献できるものはないと思います。しかし、だからといってチベット人はこの地球上で冬眠してきたのではなくて、チベット人もそれなりに頭脳を使ってきたのです。多分、それは精神的な面だと思います。私達をその精神的な面において、少なくとも過去四百年にわたって導いてきたのが歴代のダライ・ラマ法王です。

二、否定されたチベット人の価値観

中国がチベットに入ってきた時、チベットは近代的文化を持っていませんでしたし、また、近代国家的な中央集権体制もありませんでした。そのためにせいぜい私達ができたことは国連やネパールやインドといった近隣諸国に訴えることでした。さらに元々遊牧民であるチベット人そのものの根本的な考え方の中に、国家意識というものが強くないのです。私達は絶えず移動していますので、土地に対する執着心もそれほど強くはありません。そのために、非常にルーズな社会ではありましたが軍隊を作って、外国と戦うといったことはこの四百年の歴史の中では余りなかったのです。

結局、私達が選んだ道は、中国側と何らかの形で共存できないかということで、一九五一年にチベットは中国に代表団を送りましたが、その後、中国は一方的にチベットに対して条約を押しつけたのです。その条約は十七ヶ条の協定といい、チベットを平和的に解放するための条約と称しておりました。私達はその条約が結ばれる過程そのものも決して平等とは思っていないのですが、一九五一年から五九年まで事実上八年間、この条約に基づいて中国と何らかの形で共存できないかと努力しました。この間もダライ・ラマ法王は自らインドや中国を訪問し、少しでもチベット人の価値観に基づいて生活できるような環境づくりを確保しようと努力しました。しかし、その努力が実らなかったのは、中国が自分たちの価値観に基づいた解放のみを許すとして、チベット人の能力や社会が必要とする改革はむしろ妨害するといった戦術に出たからです。中国の意味する解放というのは、チベット人の価値観を否定するということです。一九六七年以降、中国の文化大革命の中にそうした思想が現れましたが、チベットではそれ以前に実行されていたのです。例えば、チベットに約六千ほどあった寺院の破壊、道徳的価値観の否定、さらには政治体制の否定というところから始まって、それまでの既存の制度を全てひっくり返そうとしました。また、知識人や社会に影響力のある人々を次から次へ最初は「招待」という形で中国に呼び、後にそうした人々を、「民主的な教育を施す」との名目で監禁したわけです。やがて、民衆の方もだんだん我慢できなくなって、あちこちで反中国運動が起きたわけです。

中国が十七ヶ条の協定に基づいてチベットの近代化に協力するということで、まず最初に手掛けたのが道路の建設でした。後になって分かったことですが、労働力としてチベット人が駆り出されたのです。元々私達は自給自足ができる程度の農業しかやっていませんので、土地も東は豊かですが西部や中央チベットでは非常に貧しいのです。そうした状況なのに道路工事のために駆り出され、農業は労働力を失ってしまったのです。

また、中国の軍人はチベットを解放しに行くんだと教育されていますので、初めから優越感を持ってチベットにやって来ました。野蛮人であるチベット人を解放してやるんだという気持ちで来ましたのでそこにもチベット人と中国人の気持ちのズレがありました。その一つの現れとして中国の若い軍人たちが町に残されたチベットの女性達に次々と乱暴を働いた結果、私達は決起と呼んでいますが各地で暴動が起きました。そ

●85年の来日の際の歓迎レセプションで(共催：チベット文化研究所)

れがピークに達したのが一九五九年三月です。ダライ・ラマ法王を中国が駐屯地に「招待」したことに民衆が立ち上がって、いわゆる三・一〇ラサの決起が生じたわけです。それ以後、ダライ・ラマ法王はインドに亡命し、インドのテスプールという場所で外国人記者達に、チベット問題はあくまでも話合いで解決すべきだと語りましたが、現在も、法王の気持ちは全く変わっておりません。

三、あくまで平和的解決を望むダライ・ラマ法王

一方、民衆の方には色々な考えの人がいます。現に一九七二年まで、ゲリラ活動を展開してきた人達もいます。先日、日本のテレビでも報道していましたがゲリラのもとへ法王からのメッセージが届きました。彼らはチベット国内ではゲリラ活動ができなくなってきましたので、ネパールのムスタンというところに本拠地を移し、そこから国内に入り、ゲリラ活動を続けてきました。ネパール政府からも中国政府からも挟み打ちされそうになっても、ゲリラは最後まで戦うつもりでいたのですが、法王はそのメッセージの中で、「防衛のためには中国人とチベット国内で戦うのはやむを得ないが、チベット領土外で中国人の血を流すことは他国の秩序を破壊することになるので、チベット人が求める幸福そのものの資格がなくなってしまう」とゲリラ達に武器を捨ててネパール政府に降伏するように勧めました。その時、法王の命令に背くわけにはいきませんが、中国に復讐するという固い信念を持っていたゲリラの中には自決する者も沢山いました。それにも拘らず、法王は祖国チベットに自由を取り戻すためにはあくまでも平和的手段を取るしかないということを強く訴えました。その結果、ゲリラも降伏し、現在はインドやネパールで生活しています。

法王は自伝にも書いていますが、毛沢東に対しても最初から否定するのではなく彼の良い面も理解しようと努めました。そして、文化大革命が起きた当時の中国の状況などを考えた場合、毛沢東という人物もどこか評価できる部分もあるのではないか、ただ単に大系的に知っている屠殺人毛沢東だけではなくもう一つの面があるのではないか、とチベット人に語りました。

一九七十年代は法王の努力が、ある意味では全く中国に対して利き目がなかった時代です。当時の中国は国際世論は全く無視していましたし、無視してもやっていけるような状態にありました。ところが、七十年代後半になって中国に変化が生じ、鄧小平を中心としてリベラルな考え方を持つ人達や胡耀邦のように非常に大胆で勇敢な発言をする人々が出てきました。完全なる結果はみておりませんが一つの明るい希望を持つことができました。八十年に当時総書記の地位にあった胡耀邦がチベットを訪れ、自ら中国のチベットへの態度は過ちであったと認めました。そのように中国の中に柔軟な考えを持つ人々が現れることによって、それまで法王が唱えてきた方針や政策に対して一層希望を持てるようになりました。

四、法王にお叱りを受けた私の提案

法王は、「もし中国が世界中に宣伝しているように理想の社会主義国家ならば世界中の人々に見せればいいのであって、ドアを閉めて中を見せないことはおかしい」と絶えず言い続けてきました。その結果、私達の方から代表団を四回派遣することになりました。また、中国もそれまでの政策の反省も含めて、八一年頃に憲法改正があり、連邦政府まで考えるのではというところまでいきました。ところが、中国と私達が話し合う土台に、あと一つしっかりしたものがありません。やはり、お互いに信頼関係がないわけです。法王としては信頼関係を築くことから出発しなくてはいけないという考えです。そこで、法王の提案でチベット人を中国に先生として送るということになり、中国側もそれを受け入れることになりました。私が一生懸命頭を絞って考えたことは、送り込む人間にスパイ教育を施すということでした。

ゆくゆく私達が立ち上がる時に役に立ちますと得意になって法王に提案したところ、逆にお叱りを受けました。私達の間に一番欠けているのは信頼関係であり、相手に誠意を求めるのであればこちらも誠意をもって接しなければいけないと言われました。その時の自分の惨めな姿を思う度に恥ずかしくなりますが、それがダライ・ラマ法王だと思います。普通の政治家であれば、私は肩を叩かれて良い気持ちでその場を後にしたかも知れませんが、ダライ・ラマ法王の場合には誠心誠意で自分の哲学をもって対応して下さいます。

この計画は、結果的に中国の方で受け入れてくれなかったのですが、いずれにしても法王としては双方に

信頼関係を築くというところから出発すべきで、そのためには外国にいるチベット人は国内に帰り、チベット人の生活がどの様なものかを見る一方、中国もチベット人は何を考え、どの様な価値観を持って何を求めているのかを知るべきだと言っております。

中国政府が犯している大きな罪は、単にチベット人をだましているだけではなく、中国人をもだましていることです。歴史そのものが書き換えられています。中国では最初から「チベットは中国の辺境地域であり文明もない」と教科書で教育されているので多くの人はそれを信じ込むわけです。法王はまず、お互いに色々な基礎的な概念の間違いを正すことから全てが始まるとして、中国に代表団を派遣しました。

一方、中国と話し合う時には何の保証もありませんでした。それまでの体験から中国と何かを約束しても一方的に破られることが多く、約束が果たされる保証がなかったのです。その保証として私達が求めたのは、国際世論といいますか世界中の人々の耳目でした。

法王は一生懸命に世界各国を走り回り、チベットの現状を訴えると共に自分自身が将来のチベットに託している希望を説明しました。それだけではなく、海外にいる中国人の留学生や知識人に会うようにして、基本的には中国人もチベット人も同じ人間でありお互いに幸福を望んでいるのになぜ今のような状況になっているのかということを語りました。

一方、胡耀邦を中心とする、人間の自由というものについてある程度関心を持っている人々にもこちらからテコ入れして環境作りをするという気持ちも持っていました。例えば、胡耀邦が総書記長主席制度を廃止して総書記になった時、法王は祝電を打ちましたが、中国は人民日報にその電報を掲載して、一応チベットに対する意思表示をしました。そうしたことが続いた後、八三年後半から中国で精神汚染撲滅運動というものが始まりました。中国では北京で始められたそういう運動が地方ではより過激になります。

チベットでは八三年十月に一挙に五百名のチベット人が逮捕されました。中国は、窃盗など単なる軽犯罪で捕らえたなどとでっち上げているのですが、捕まった人々は民族運動に関わっている人ばかりでした。

それまで法王は八五年をめどに一度は中国に行くことを考えていたのですが、五百名も一日にして捕まったことから再びチベット人は中国に対する不信感をつのらせました。「今の状況下で法王が行ったら人質になるだけだ。法王が人質になれば世界にチベット問題を訴えても耳を傾けてもらえなくなるので絶対に帰らない方が良い」という嘆願書が沢山届きました。同時に八三年頃から鄧小平体制が徐々に中国全体で権力を握るようになってからは、反毛沢東で結び付いていたのが今度は鄧小平派、陳雲派など新しい派閥の動きが出てきました。それでも法王は諦めずに世界中に訴え続け、八七年にはアメリカ議会で五項目の提案をしました。その理由の一つは、チベット人が独立するしないといった問題より、もっと大きな問題である環境問題が生じたからです。

五、踏みにじられているチベット人の人権

中国はチベットの自然環境を破壊したためにチベットだけではなくアジア全体の気象が影響を受けています。チベットの東部は森林地帯なのですが、ほとんどの木が切り倒され、中国本土へ送られています。また、チベットには珍しい動物が生息していますが、その一つのジャコウ鹿に対して中国は法律的には殺すことを禁じていますが、実際には軍がシンジケートを持ち香港経由で売りさばくルートを作っていて、そうやって計画的にチベットの鹿を殺しているわけです。パンダの場合も、助けようという世界的な運動がありますが、なぜパンダを助けなくてはいけないのかといえば、パンダの生活環境が破壊されてしまっているからです。世界中の木が贈られてきても、パンダがそれを食べるわけにはいきません。むしろ、生活環境そのものの確保ということに法王は危惧を抱いています。そうしたことから五項目の一つに、環境問題を大きく取りあげたのです。

もう一つは、それまで政治問題であったチベット独立の回復ということよりも、チベット内での中国人の存在が大きくなるにつれてチベット人の人権が完全に踏みにじられているという人権問題があります。食べ物一つにしても食堂へ行っても、中国の料理ばかりでチベット人が食べるものがないのです。食事ぐらいどうってことないだろうと思われるかも知れませんが、長い間そこに住んでいる人間にとっては食生活は簡単に変えられません。ところが、チベットでは全て中国人に合わせなくてはいけないのが現状です。学校でも

中国式教育が行われ、しかも設備が良い学校には中国人か中国人と結婚している人の子供が優先的に入り、チベット人が通う学校は粗末なものです。

六、奥地へ追いやられるチベット人達

さらには八十年代になってから中国はチベットを外貨獲得の手段として観光地化しましたが、観光関連事業のほとんどを中国人が牛耳ってしまい、外国人がチベットを訪れても利益は中国のものでチベットのものにはなりません。それだけではなく、それまでは無理矢理に若い中国人を下放政策で地方に派遣していましたが、八十年になってその政策を止め逆にインセンティブを与えるようになりました。

例えば服役中の軽犯罪者がチベット行きを志願すれば刑務所から釈放され、チベットで床屋などを始めるのですが、チベット人より中国人の方が確かに仕事も早くテキパキやるので、どうしてもチベット人が職を追われる結果となり、中国人の数が増えていきます。そして、本来チベット人が住んでいた町や村に中国人が入ってきて、チベット人が奥地へ追いやられるという問題が出てきたものです。だから、独立云々以前にまず民族として存続することが大切だと第二の項目として人権尊重を訴えたわけです。

第三の問題として、中国は今まで三十回ほど核兵器の実験を行っており、中国の核兵器の二十五パーセントはチベット内にあるのではといわれていますが、断定はできません。チベット人には口コミで伝わって来る情報しかなく、偵察衛星を使って証拠写真を撮ることはできませんが、もしそれが本当だとすると、チェルノブイリ事故級の事態が万が一発生した場合は、チベットだけではなくアジア全体が非常に危険です。中国に核実験を止めさせるだけではなく、中国が積極的に支援している平和地帯構想をネパールだけに留まらずヒマラヤ地域全体に広げて、チベットの場合はミャンマー、インド、ネパールそしてヒマラヤを挟むとパキスタン、アフガニスタンやモンゴルなど様々な国と接していますのでこの地域を平和地帯化する方がより実用的です。そして人口の多いインドと中国両国が軍備に使っているお金を福祉のために使うことを提案したのが三つ目の項目です。

五つ目の提案として法王は引続き中国に対して、積極的にチベットの将来について話し合うことを呼びかけました。

アメリカ議会での演説はヨーロッパ各国の議会で認知され、さらに法王は八八年にヨーロッパ議会に於てより具体的な提案をし、チベットと中国はあくまでも別個のアイデンティティーであるが、中国全体の中に共存することはやむを得ないだろうという見解を示しました。もちろん、それに対してチベット人の中には納得のいかない人もいますが、法王はより現実的な選択をするためには中国に対し外交権、ある種の宗主権のようなものを認め、中国のメンツも立てながらチベットの実際の利益を考えなくてはいけないと提案されました。その中で、法王がチベット国民に強く訴えたのは、私達は中国人と共存することに反対しているのではなく、チベットの現状と過去に中国がとった政策に反対しているのであって、もしお互いの利益が十分に尊重され、チベット人の幸福につながるものであれば共存しても良いということです。

私の母が法王のヨーロッパ議会での演説を聞いて一番最初に思ったのは、やはり「納得がいかない」ということでした。私は兄を二人殺されています。母からすれば、親や息子達を殺した中国人と一緒に生活することは考えたくないのです。「法王がそうした演説をする前に、あなたたちがそばにいながらどうして考え直して欲しいと言わなかったの」とさんざん怒られました。母のようなチベット人は沢山いますが、法王としてはチベットと中国が地球上に存在する限り、お互いに共存できる道を探さないで憎み合うだけでは幸福にはなれないと強く訴えています。

七、ダライ・ラマ方式とアラファト方式

今回のノーベル平和賞授賞の理由の一つはダライ・ラマ法王の今日までの努力に対する評価だと思いますが、私達はむしろそれよりも法王が何を訴えて、何をしようとしているのかというその方針に対する評価だと思います。ダライ・ラマという一人の人間よりも、その哲学、信念に対する評価だと思いますので、ややもすれば今日の世界においてその訴えが聞こえてこない人々に代わって、法王が受賞したのではないかとも思います。ですからチベット人だけの、あるいはダライ・ラマ法王だけのノーベル平和賞だとは思っていませんし、また法王が受賞したことについても多くの方々のお力添えが

あったからこそ実現したものと思います。受賞のために特別な運動をしたわけではありませんが、色々な人が法王の哲学なり考え方を伝えていくことによって、より多くの人が知ることとなり最終的にあのような形になったのだと思います。そうした方々の良心といいますか、人間が持っております善悪の基準が評価されたと私は思っております。

日本の各新聞の社説を見ますと、素直にお祝いして下さる社説もあれば、これは政治的判断であるという社説もあります。また、チベットの過激派の活動を激化させるのではないかという見方もあります。

チベットにはアラファト式とダライ・ラマ式という言葉があります。ダライ・ラマ式というのは、今までは認められていませんでした。いくら平和的に訴えてもアラファト式の方が国連で堂々と演説できるし、ダライ・ラマ式は一対一の時は同情してくれるが国際世論の形にはなっていないというのが今までの一部のチベット人の考え方でした。そうした意味でも今回のノーベル平和賞受賞は世の中にはちゃんと見ている人がいて法王のやり方を支持してくれたということで、今後チベット人社会の中においてダライ・ラマ式が確実に力を得ると思いますので、一部の方々が心配するような結果にはならないと思います。

政治的判断だという批判めいた声もありますが、私達からすれば、例えば電車の中で弱い人がいじめられているのを見て見ぬふりすることが常識なのであれば、私達のように虐げられている民族を助けることも非常識なのだろうということです。

やはり、道徳といいますか、人間は全てのものに当てはまる基準を持つべきだと思います。中国で天安門事件が起きた時、私はなぜ日本政府がもっと強く批判しないのかと思いました。かつて、ジャンボ機ハイジャック事件が起きた時に、当時の総理大臣は人命は地球より重いと言いました。天安門事件であれだけの人が殺され、チベットではそれ以前にもっと殺されています。チベットのことは衛星中継で放送されたわけではないので、知らなかったと言われればそれまでですが、世界中が見た天安門の惨劇に対してはっきりとした批判がなかったのは普遍的価値観がない人にとっては納得のいくことなのかも知れません。残念なことですが、今後私達も努力し、日本の社会に於ても考えていかなければならない問題だと思います。

八、長引くラサの戒厳令

次に和解についてですが、八九年の六月から中国政府と連絡のパイプは保っていますが、直接交渉は行っていません。天安門事件は一つの象徴に過ぎず、中国では目に見えない残酷なことは数多く行われています。チベットでは天安門事件の三カ月も前から戒厳令がしかれ多くの人が刑務所に入れられ、女性もひどい拷問を受けています。九月十一日にもデモを行っていますが、死を覚悟した上のデモです。

こうした人々のために私達ができることは、中国政府に私達なりに不信感をはっきりと表明するということです。最近になって中国の方から話し合いを呼びかけてきましたが、私達は話し合うことには何の異存もありません。最終的に双方が納得のいく形で、幸せになる方向へ持っていくしかありませんが、現状ではラサに戒厳令がしかれている限りにおいて、話し合いができる環境ではないと判断しています。中国がラサの戒厳令を解かないうちは具体的な話は進みません。しかし、一度話合いのパイプを切ってしまうと復活させるのが大変ですので、依然パイプそのものは保っています。

最近、中国の民主化運動を海外で行っていこうとするグループが出てきました。特に有名なのは「民主中国連合」ですが、私達はこうした組織に直接参加するのではなく、外部から協力するといった形で間接的な支援をしています。

九、ノーベル賞の副産物

法王がノーベル平和賞を受賞したことによって、日本でもそれまで考えもしなかった方々から声をかけていただいて有難いのですが、一方では受賞したことによって利用価値も高くなったわけです。その一つの例が、最近マスコミで話題になっている某新興宗教団体です。同団体の教主と法王が握手している写真の載ったパンフレットをばらまいたり、自分の血を飲むことがチベット仏教の高邁な修行であると称して、相当な金額で信者に血を売っているようですが、こうした人達が今後も出てくることが考えられます。

ノーベル平和賞は大変有難い賞ですが、副産物もあるということも最近感じています。社会に迷惑がかからないように、またノーベル平和賞の名を汚さないようにチベット人としてまた個人としても気をつけたいと思います。

十、自然との関わりを大切にするチベットの人々

法王の哲学、例えばヨーロッパ議会で演説した環境問題ですが、一般の方は、自分の国が生きるか死ぬかという時になぜ環境問題なのだと思われるかも知れません。チベットには自然と調和し祖先の霊を祭ってきたボン教というのがあり自然との関わりを大変大切にしているからです。「自然への愛着」といいますと欲望的に聞こえますが、自然に対する恐れ、思いやりを忘れずに、人間と自然との調和、宇宙全体との調和を大切にしていかないと自己破滅に至ると教えられてきました。

山が好きな方には申し訳ないのですが、チベット人にとっては「山を征服する」などという表現は非常によくないのです。山は征服するものではなく、敬う気持ちを持って接するものであるという自然の摂理に沿って生活するべきだと考えます。法王がヨーロッパ議会の演説の半分以上も環境問題にさいたのは、チベットに余裕があるからではなく全ての人が幸福になるためには、地球全体のことを考えなくてはチベット人に限らず人類全てが幸福ではなくなるという信念があったからだと思います。

こうしたことについては、つい最近も日本のテレビ取材の方々にも、「自分は幼い頃から宮殿の中から外を覗くことしかできなかった。だから、自由に対する憧れがあった」と申しています。これは法王の率直な考えだと思います。双眼鏡で覗きながら、外で遊んでいる子供達の方が自由だと思ったそうです。幼い頃からの人間の自由への憧れを今でも捨てず、大切にする気持ちを養ってきていると思います。

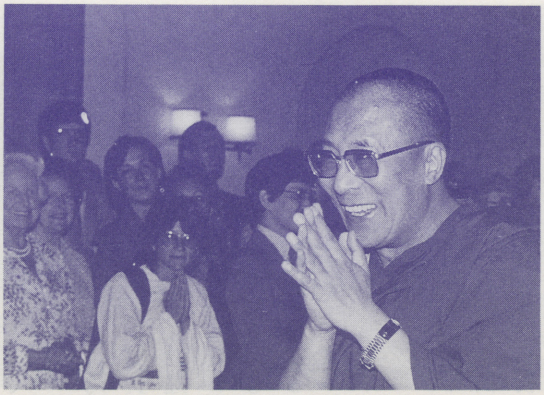
十一、民主的制度を備えたチベットの成立こそダライ・ラマの悲願

インドは法王にとっては人生の中で大切な時期に関わりができた国で、一九五七年に初めてガンジー翁の墓所を訪ねた際に、自分に近い魂のようなものを感じたと話しています。以来、ガンジー翁の偉大さ、思想を尊敬しております。幸いにしてインドにはまだガンジー翁の遺志を継いでいる人々が沢山いまして、そうした人達と親交を深めることにより、日頃の考えが周りからの教えと混ざり合って確立しつつあると思います。

今回、インドの総選挙で野党が勝ちましたが、野党の中に不思議なことに個人的な友人が多いのです。インドの社会主義には二つのタイプがあり、一つは人道的立場から社会主義運動を展開している人達です。こうした人達と自然につながりができ、それが法王に影響を与えていると思います。そうして法王の人道主義、民主主義思想が形成されています。

今年の三月に、「チベット議会もそろそろダライ・ラマ抜きでチベットが歩めるような方法を考えなくてはいけない。ダライ・ラマはチベット社会に役立つから存在しているが、この制度自体を世界的な視野で、考えた場合、果して効率的かどうかということを考えてほしい。自分の考えとしてはできれば早いうちに国民の選んだ人物が実際の政治的指導者となり、国民に責任を持って政治を行うべきである。自分は超越したような立場で今後も精神的な指導はするが、政治には自分ではなく他の人が携わった方がよい」と話しています。

今の状態ではチベットは王様がいなくてはやっていけないわけで、その王様の役をダライ・ラマ法王が務めているのです。法王は五十二歳になりましたが、自分が生きているうちにチベットが民主的制度を備えた国家として成立することを強く願っています。


●83年スイス・コーのマウンテンハウスを訪れたダライ・ラマ法王

法王の発言には相当の影響力がありますので、今は副作用的な反応も出ていますが、それもチベット人自身が直面し解決しなければならない運命だと思います。

法王はチベットのダライ・ラマとしての責任と人間ダライ・ラマとしての信念と理想を持っており、その二つを上手に両立させられるかどうかということが、法王にとっての大きな課題ですし、また、実現させるためには世界中の多くの友人達の支援が必要だと思います。

来年、法王が来日されることを期待していますので、この続きは直接法王からして頂きたいと思います。ご静聴有難うございました。**（終り）**

青年海外協力隊員として

アフリカ・ザンビアで過ごした2年間（その9）

寒河江　亮
さがえ　りょう

一、ザンビア人の友達ができない！

もう赴任してから半年以上が過ぎたのに、ザンビア人の友達ができない。

私とザンビア人との交際の範囲は正直に言って非常に狭く、定期的に挨拶を交わすのは自分の学生達と、毎朝部屋を掃除してくれるおばさん達くらいのものだ。勿論、その他にも道で会えば立ち話をする程度のザンビア人は何人もいるがそれだけの話で、例えば同僚の教師の家に食事かお茶に招かれたりしたことは一度もない。もう少しはっきり言うと、現在私はザンビア人と交際していますと胸を張って言える状況にはないということだ。この前帰国した隊員の一人も、二年間の任期中、一度もザンビア人の家に招かれなかったと言っていた。私もそれで終わると考えると恐ろしくなる。

しかし、だからといって自分がザンビアで孤独な暗い生活を送っているのかといえば違う訳で、他の外国人や日本人に限れば、私の交友範囲はむしろ広い方だと思っている。その中にザンビア人が入っていないことが私を苛立たせている。ザンビア人とは決して付き合うものかと決心してこの国に来た訳ではないし、むしろ一生付き合えるような友人を作るつもりでやってきたのだが、一体私の何がいけないのか、何が間違っているのか。ザンビア人と仲良くなりたいという願いが他の隊員のそれよりも弱いとは思わないのだが。

交際が単に物理的な交流を意味するのならば、私はザンビア人と交際していると言えなくもない。しかし、何か割り切れぬものが心に残る。単なる交際術では物足りない。心が通っている気がどうしてもしない。目に見えない壁の向こうに彼らはいる。

間違っているかも知れないが、経済的な格差という問題を少し考えてみたい。

私達が受け取っている生活費（海外手当）は日本の感覚では少ないとはいえ、国によっては大臣級、あるいはそれ以上の桁外れの金額となる。（ザンビアでも少なくとも国家公務員の医者の給料より多かった）だから贅沢な生活をしようとすれば簡単にできるし、実際していると思う。それが協力隊員として良いとか悪いとかという議論は別にして、まぎれもない現実であり、その額も年々増額されている。また私は隊員が現地の人達と同じ水準で生活をすべきであるとは必ずしも思わない。恐らく病気や事故が続出し、協力活動自体がストップしてしまいかねないし、たとえそうしたところでそれは二～三年間という期限付きの擬似体験に過ぎず（一部例外はある）、帰国後は青春の一ページとして心の中にしまわれてしまうだろう。だからやれるのだ。

同じ生活を、いや、もっと悪くなる可能性の方が高い生活を一生続けなければならない人々の前で、果たして民衆と苦楽を共にしているなどと胸を張って言っていいものだろうか？　どこの国でも大衆は偽善には敏感である。

結局、根底には善意や同情だけではどうにもならない状況があるということを押さえておかないと、折角の協力活動も空回りしかねない。貧しい人々に善意を施したという私達の満足感は満たされるかも知れないが、彼らを苦しめている環境そのものが変わらない限り、問題が尽きることはない。

私達を見つめる彼らの目の、一瞬の翳りを見落としてはならない。

交際というものをそういう観点から捉えるのは間違っていて、単に私自身の言動に問題があって彼らに敬

遠されているだけなのかも知れないし、実際にそうした格差を乗り越えて友情が成立しているケース（そう錯覚しているものも含めて）も私の知らない所であるのかも知れないが、この国の大衆の置かれている現実の社会状況と自分の立場を対比した場合、例えそうであったとしても、私はこの点を簡単に割り切ってしまうことはできない。個々の友情や信頼は確かに純粋なものであるべきだと思うが、その背景にある社会構造を無視してはならないと思う。

人間は平等であるべきだという理想と、果たして実際にはどうなのかという現実は峻別されなければならない。〝民衆志向〟、〝現地密着主義〟大変に耳当たりの良い言葉ではあるが、本当にそうなのかもう一度その意味をよく嚙みしめてみたい。私達はボランティアという身分でザンビアに派遣されたが、既に富める国、貧しい国の格差を背景とした存在である。国と国との格差が個人と個人の格差としてストレートに反映されている。どのような理屈をつけようと現実的に日本政府の手厚い支援なしには存在しえない私達は、ある意味では非常に政治的な存在なのかも知れない。

それにしても友達が欲しい！

二、私達の英語が通じない！

このエブリンホンカレッジには、58年3次隊から私を含めて四名が初代教師隊員として派遣されたが、予想通り英語には全員が相当頭を悩まされている。行けば何とかは、やはりならなかった。先ず、何か返事をしようにも相手が何を言っているのか殆ど聞き取れない。たまに返事できても今度は相手に通じない。まさにお手上げの状態である。

勿論、日常生活に支障があるということではない。私達の言葉の不充分さを理解してくれる寛容なザンビア人達、仮に私達が単なる旅行者であったならば問題はなかった。問題はこの程度のレベルの英語で大学で講義をしなければならないということである。デモンストレーションが主で比較的短期間に結果が見え、その成果で判断がつく職種なら話は別なのであろうが、教育のような五年、十年、或いは二十年の単位でしか成果が見えてこない分野の隊員には、本来はやはり相当高度の語学力が求められていると私は判断している。だからこそこれまで随分と心苦しい思いをしてきたし、今でも学生達に申し訳ないという気持で講義している。

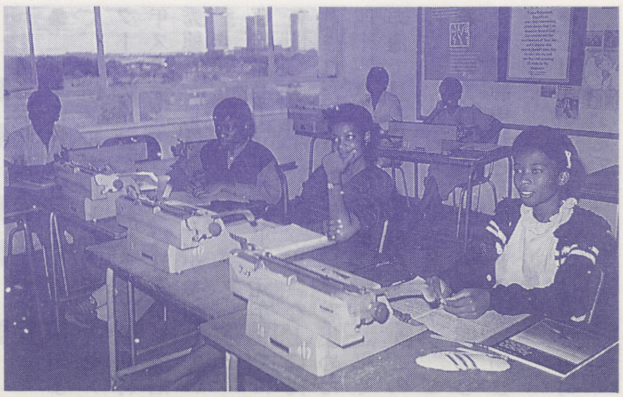
もし私が日本で、片言の日本語しか喋れない外人に物理を習うことを想像すると空恐ろしい気がする。ジェスチャーやスマイルだけでは写真は教えられない。やはり地道な努力と前向きな考え方で一日一日進めていくしかないのだ。

さて、具体的にどのような問題があるのかというと、発音が悪くて相手に通じないこと、リスニングが不充分なため相手の言っていることが理解できないこと、文法、構文力共に不足していること、知っている単語が大変少ないことの四つに大別できる。なんだ、全部じゃないかと思われるかも知れないが、これらのことは全て密接な関係を持っていて、どれが欠けてもスムーズな講義は望めない。

まず発音であるが、これは日本人の、いや私の最も苦手とする所であり、せっかく正しい単語を使っているのに伝わらないという悲劇がよく起こる。何回も言い直しているうちに永久に伝わらないのではないかと段々絶望的な気持になってくる。こうなったら紙に書いた方が絶対早く伝わる。

私の場合、学校で学んだことは別にして、本格的に英語に触れ始めたのが二十五歳前後だったということもあり、これからネイティブな発音を体得していくことは難しいだろう。特に、R、L、V、F、TH等、日本語では使わない音は意識すれば何とか発音できるが、完全に忘れ去っていることが多い。

その対策として、出来るだけクリアーでニュートラルな発音（自分でそうだと思い込んでいるだけかも知れないが）を常に心掛けることや、他人のきれいな発音の真似をすることなどである。通じないからといって単語毎に文章を区切ってまで話すことは却って会話全体のリズムを損



●ウーン。何だか分かったような分からないような……

なうと思うので、できる限り普通のスピードで話すことを心掛けている。会話に流れのようなものができると、それこそ知らない単語も何となくフィーリングで分かる時があるから不思議である。

結局、発音に関してはほぼ諦めの境地にあるので、学生達には「私は写真の講師であって英語教師ではない」と開き直ることにしている。

リスニングがこれまた難しい。ザンビア人といえども英語はあくまで外国語として学校で学ぶのだから発音に個人差があるのは当然である。また、ザンビア人以外のフィリピン、パキスタン、北朝鮮など様々な国籍の人間が話す英語にもそれぞれ独自の個性が感じられ面白い。

私にとって最大の難関はインド人の英語であったが、最近ようやく耳が慣れてきた。対策はとにかく慣れることに尽きるが、聞くということはその内容を理解するということだから、結局は総合的な英語力が試されているということである。私は聞き取れない所は遠慮なく聞き飛ばすことにしている。決して深追いはしない。しかし、ここだと思った所は確実に押さえるべく努力している。全文を聞き飛ばしてしまうこともままあるが。

余りの語彙の貧弱さに涙する？

文法、構文力といったのには少々訳がある。当然ながら日本語と英語の文法は全然違う訳で、その背景には文化や歴史の違いというものがある（と勝手に思っている）。私がよく犯す失敗は、英文を頭の中で日本語的発想で作ってしまうことだ。なんと分かり易い英文だろうと自分で感心しながら喋っても、相手にはチンプンカンプンということがよくある。日本人には日本人の発想があるように、相手にも相手なりの発想がある。日本語で考える部分と英語で考える部分は頭の中で別にすべきなのかも知れない。そうしたからといって私達が外国の文化や歴史を自分のものにできる訳ではないが、知る努力をすることによって或る程度はジャパングリッシュから脱却できるのではないだろうか。時々は英語を頭の中で日本語に翻訳する作業を省いてそのまま英語で考えることもある。そういう時は会話もやはりスピーディーだし、よく通じてもいるようだ。特に講義をしなければならない隊員には大切なことだと思うので頑張って自分を訓練していきたい。

最後は語彙の問題だが、私は十一万語収録などと書かれた英語辞典を手にする度に気が遠くなる思いがする。写真の専門用語に関しては、写真技術そのものが外来のものであることから割合と苦労は少ないが、いざその説明をしようとすると、一般的な語彙の不足に直面する。変に難しい単語は知っていても、全く初歩的な言い回しを知らなかったために説明ができない時などは本当に悔しい。新聞や雑誌で知らない単語が出てきた時は、そのつど辞書を引くようにしているが、なかなか覚えられない。中学・高校時代に英語を熱心に勉強しなかったツケが回ってきた感じで、遅いかも知れないが充分に反省している。

派遣前の語学訓練は意義があったと思うし、三カ月という限られた期間であれ以上のことをやろうとしても多分私達の頭の方がついていかなかったと思う。むしろ勝負は現地に到着してからだろう。そして伸びる人は伸び、伸びない人は伸びない。語学上達とは相手の立場を理解し文化や考え方の違いを知るということであれば、小手先のことでは全く通用しないだろう。それは己れを知るという作業でもある。コミュニケートするに値する自分というものをしっかりと磨いていきたいものだ。

（次号に続く）

事務局近況

●二月二十四日（土）に行われた第十二回通常総会で、平成元年度事業報告書・決算報告書、及び基本金への剰余金の組み入れの件が満場一致で可決されました。引き続いて第二部として行われた文化講演会では『内なる国際化』―ラオス系日本人が見た第二の祖国「日本」と題して、麗澤大学助教授の竹原茂（ウドム・ラタナボン）氏にご講演頂きました。最近、日本人の心の難民化が進んでいるのではないかという氏の指摘は、真剣に受け止めていかなければなりません。尚、講演の様子は次号のニュースでお伝えする予定です。

●二月十八日（日）より五月中旬まで、豪州メルボルン市のMRAセンター・アーマで行われる第十六回青年スタディーコースに日本から浅沼秀穂君と北口治子さんが参加しています。

●昭和二十三年から平成元年までに、新聞、書籍、教科書、事典などに掲載されたMRA関係の記事を集めた四十四ページの資料集「新聞記事その他で見るMRAの歩み①」がこの度完成しました。非売品ですが、ご希望の方には一部三百円でお頒けします。お申し込みはMRA事務局までどうぞ。

●IMAJニュースNo.61は五月初旬に発行の予定です。